

## エペソ書2章 11-22 節 「平和なるキリスト」

### 1A 以前の姿「肉による異邦人」 11-12

### 2A キリスト・イエスにある今 13-18

1B キリストの血 13

2B 一つにする平和 14

3B 敵意の廃棄 15a

4B 神との和解 15b-16

5B 平和の使者 17

6B 御父への近づき 18

### 3A 聖徒たちと同じ国民 19-22

1B 神の家族 19

2B 礎石なるキリスト 20

3B 組み合わせられた成長 21

4B 御霊による宮 22

## アウトライン

今朝は、聖書通読の学びからお休みして、神の恵みの学びをしてみたいと思います。先週は、「恵みによって生きる」という題名でリッチ・チャンさんが神の御言葉を取り次いでくださったと思いますが、神の恵みが教会によって完全に現れていることを、エペソ書を通して見ていきます。実は、今回のように、聖書通読の学びを中断して、これまでエペソ書 1 章とエペソ書 2 章前半を学びました。

そして興味深いことに、私たちを送り出している教会、カルバリーチャペル・コスタメサでは、エペソ書の学びを朝の礼拝で行っています。牧者ブライアン・ブローダソン(Brian Brodersen)さんが、1 章 6 節にある「恵みの栄光」について次のように説明しました。私たちが神の恵みのすばらしさにして見失ってしまう時に、次の三つの要素のいずれかを忘れてしまっているからだということです。①神がいかにもすぐれているか(High View of God)、②人間がいかにも卑しい存在か(Low View of Man)、③キリストが何をしてくださったか(What Christ did through God's grace)。この三つのことを深く思い巡らす時に、私たちは神の恵みにある栄光、その華麗さを知り、私たちはただこの方にひれ伏すばかりになります。2章は、②から始まります。つまり、人間がいかにも卑しい存在であるか、以前の自分の姿がどのようなものであったかを教えています。

### 1A 以前の姿「肉による異邦人」 11-12

11 ですから、思い出してください。あなたがたは、以前は肉において異邦人でした。すなわち、肉

において人の手による、いわゆる割礼を持つ人々からは、無割礼の人々と呼ばれる者であって、12 そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。

「あなたがたは、以前は肉において異邦人でした。」と言っています。この「肉において」というのは、血縁的、民族的に非ユダヤ人であるということですが、それだけでなく「肉に従うしかない定めの中にあった」という意味もあります。エペソの町に建て上げられた教会は、その多くが異邦人でした。エペソの人々は、ユダヤ人の持っている律法とは全く無関係の、異教的な価値観の中で生きていました。アルテミスという女神の神殿が町の中心にあり、偶像礼拝を盛んに行っていました。さらに、性的にも非常に乱れた中にいました。したがって、「肉において異邦人でした」という時、単に血縁的に非ユダヤ人というだけでなく、神からもキリストからも、律法や契約からも遠く離れた存在として話しています。

パウロは 2 章 3 節にて、「自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い」と言いました。自分の心に思い浮かんだことにしたがって生きる、「自分のやりたいように生きればいいではないか」という哲学の中に以前は生きていたことを話しています。そのようなことを行なっていれば、3 節にあるように「御怒りを受ける」、神の怒りを受けます。けれども、ここ 2 章後半には、神から遠く引き離されているだけでなく、神につながる者たちからも遠く引き離されていることを語っています。縦の関係だけでなく、横の関係からも引き離されているのです。

私たちも以前はそうでした。「また、だれをもそしらず、争わず、柔和で、すべての人に優しい態度を示す者とならせなさい。私たちも以前は、愚かな者であり、不従順で、迷った者であり、いろいろな欲情と快樂の奴隷になり、悪意とねたみの中に生活し、憎まれ者であり、互いに憎み合う者でした。(テトス 3:2-3)」人を赦し、それを忘れることは自分を弱くすると思って、いつまでもその思いを持っていた、そんな自分です。このようなことをしていれば、神から離れているだけでなく、人から自分を切り離し、自分を独りにさせます。

そして、異邦人としての命を、パウロは「無割礼の人々と呼ばれる者」と言いました。割礼はアブラハムに与えられた契約の印であり、神の契約の民になっていることを示しています。ですから、神から遠く引き離された者に対しての軽蔑の言葉として、ユダヤ人たちは使っていました。

具体的には「キリストから離れ」ています。イスラエルを照らす希望として、キリストの約束が与えられていました。イスラエルはメシヤを待ち望む民であります。しかし異邦人は無関係です。私たち日本人は、どれだけキリストが身近な存在でしょうか？クリスマス の 時期 や、キリスト教式の結婚式でさえ、キリストから離れています。そして「イスラエルの国から除外され」ています。ネヘミヤ記を思い出していただければ、ユダヤ人が異邦人と結ばれてはいけないという盟約を思い出し

ただけだと思います。国民であるからこそ持っている権利から除外されていました。

そして「約束の契約については他国人」であります。アブラハムに与えられた約束の契約、ダビデに与えられた約束の契約、そしてエレミヤによって預言された新しい契約でさえ、それらはキリストによって一義的にユダヤ人に与えられるものでした。

そして、「この世にあって望みもなく、神もない人たち」であります。如何でしょうか、自分の生きている意味を見出している日本の人々はどれだけいるのでしょうか？今のその時の自分を生かすことしか望みがありません。死んだ後にどうなるのか、ということについて答えることはできません。そして「私は自分で生きている」として、神のない生活をしています。毎年三万人が自殺するという結果は、望みがなく、神もないというところから来ています。

## **2A キリスト・イエスにある今 13-18**

ここまでが「以前の私たち」でありました。しかし、今は違います。

### **1B キリストの血 13**

13 しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。

「以前はそうであったが、今は違います。」と、私たちは神の恵みによって高らかに言うことができます。生まれつきの盲人が、パリサイ人たちに言いました。「あの方(イエス)が罪人かどうか、私は知りません。ただ一つのことだけ知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということです。(ヨハネ 9:25)」

今の私は、「キリスト・イエスの中に」あります！これがどれだけの祝福に満ちたことであるか、分かりますか？パウロは、エペソ書の冒頭で、「神はキリストにあって、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。(1:3)」と言いました。天にあるあらゆる霊的祝福がキリストのうちにあるのです。

私たちを神に近づけたのは、「キリストの血」によります。エペソ書 1 章 7 節で、「私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。」とあります。この血によって、私たちは近づけられた者となりました。「神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。この御子のうちにあつて、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。(コロサイ 1:13-14)」

## 2B 一つにする平和 14

14 キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、

遠くに引き離されている者が近づいたこと…これを「平和」と言います。何も争っていないように見えていても、見えない壁を作りながら人との関係を保っているのであれば、それは平和ではありません。むしろ無関心は最大の敵意です。サマリヤの女がユダヤ人のイエスが水を求めたのを見て、なぜ求めるのかと聞きましたが、使徒ヨハネは彼らとユダヤ人は付き合いをしないからであるとあります。しかしキリストはその後にサマリヤの女にご自身がキリストであることを明かされ、そしてサマリヤ人がイエスを信じ、後にユダヤ人たちがイエスを宣べ伝えて、ユダヤ人のペテロとヨハネがサマリヤ人に手を置いて、彼らが聖霊を受けました。彼らの間に交わりができたのです。これが「平和」であります。平和は二つのものが一つにされた状態です。

ここで大事なものは、キリストが私たちに平和を与える、と書いていないことです。「キリストが私たちの平和」です。キリストのうちにいること、そのことそのものが私たちに平和をもたらします。

「二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし」とパウロは言っていますが、これはユダヤ人と異邦人のことです。この二つの間にあった隔ての壁をキリストがその平和によって打ち壊されました。ユダヤ人と異邦人には、深い壁がありました。それは、私たちがエズラ記とネヘミヤ記の中で見てきたように、異教の影響力から自らを守ろうとするユダヤ人がいました。しかし時を経るにしたがって、自分たちの律法とその言い伝えによって自らを固めていき、それが必ずしも神の御心にかなう形で純潔を守るのではなく、ユダヤ人の民族主義という形で保たれていきました。

私たちキリスト者も同じ過ちにしばしば陥ります。主ご自身とその御言葉に従っていき、その信仰の純潔を守ることは大切です。しかし、キリストにある純潔ではなく、ユダヤ人と同じように、この方以外の聖書についての考えでまとまる傾向があります。または、何かに対する反感で一つにまとまることもあります。自分の気に入る人々との間のみでまとまることもあります。そこで、目に見えない壁を自分たちの間で建て上げて、自分たちの城を作ってしまう過ちを犯します。

しかし私たちにとって、キリストだけが全てなのです。そしてそこには区別はありません。「そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、奴隷と自由人というような区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。(コロサイ 3:11)」キリストが高くかかげられるとき、私たちの間にある区別は消えてなくなります。

私たちは先月、東アジアキリスト青年大会に出席しました。日中韓のキリスト者の若者が、互いの国のために執り成しの祈りを捧げました。中国人また韓国人であれば、今の日本の首相のために祈ることはできないでしょう。けれども、中国人また韓国人である前に御国の市民です。だから

彼らは祈りました。ある牧師さんが、興味深いコメントを残していました。「反米、反中、反韓、反日、全てに対して神が反感を持っている。」もし、そのような感情を持っているならば、その人はキリストのうちにいないと言ってよいでしょう。

### 3B 敵意の廃棄 15a

15a ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。

キリストが律法に違反した処罰である死を、ご自分の肉体で受けられたので律法は成就しました(コロサイ 2:14 参照)。ここで大事なことは、律法に違反したのは異邦人だけでなく、いや異邦人は律法を持っていないのでただ罪の中で死んでいますが、ユダヤ人も自分の律法によって裁かれていることです。「さて、私たちは、律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われていることを知っています。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。(ローマ 3:19)」ユダヤ人も、異邦人も同じように神の裁きに服しています。そして同じように、ユダヤ人も異邦人も、イエス・キリストを信じる信仰のゆえに、神の前に義と認められるのです。

だから、キリストはすべての人を同じところに立たせる完全な平等を与えてくださいます。しばしば、死は人を選ばないと言われますね。金持ちでも貧しい人でも、人が死ぬことについては全く平等です。同じように、いやそれ以上に、神がキリストにあって与えられる義の贈り物は、等しく私たちに与えられます。あたかも、ある人が、またはあるグループの人々、ある教会が神により近づいていて、そうではない人々が神から遠くにいるようなことを教える人々は、キリストを知らないし、キリストの平和を知らないのです。

### 4B 神との和解 15b-16

15b このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、16 また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。

「新しいひとりの人」という言葉は、キリストにあって新しい創造、御霊によって新しく生まれたということです。ユダヤ人であっても、異邦人であってもキリストにある新しい性質はまったく同じであり、それゆえひとりの人であり、ひとつの体です。

ところで、「人」また「からだ」とされていることはとても大事です。私たちは画一的に、機械的に一つとなっているではありません。体は有機的に一つになっています。私は海外宣教旅行で、一つ良いことを学びました。急に具合悪くなり、悪寒がし、何度もトイレにいかなければいけません。私は病院で点滴を打ってもらいたいと兄弟姉妹に話しました。すると、全員が「いくべきで

はない。ゆっくり休んで、出すべきものは出していかないといけない。」と言います。それで三日間、ほとんど寝床にいました。四日目はまだ体が弱かったのですが、五日目には全快でした。

私たちはしばしば、表面的な違いを見て、相手を裁いてしまいます。それはあたかも、症状だけを治そうとする対処療法のようなものです。熱が出ていれば、「ならば、熱さましを飲めばよいではないか。」と言います。その問題を取り除こうとするのです。いいえ、他の体の部分がいたわり、共に熱を出し、そしてキリストの愛によって回復させるのです。私たちの理解ではそうではない、ということが多いです。けれども、キリストは私たちの理解を越えて、全人的に私たちを生かしてください。

そして「十字架によって神と和解させる」というすばらしい使信があります。私たちはかつて、神に敵対するものでした。神は、私たちのその反逆を鎮圧し、滅ぼさなければいけません。けれども、神はご自分の御子の上にその処罰を置いてくださり、それで和解をしてくださいました。神の心はこのように広いのです。

そして、この和解はこれまで敵意を抱いていたユダヤ人と異邦人の間にも与えられます。神が私たちに心を広くくださったように、私たちもキリストにあって心を全開させるのです。互いに交わり、互いに食事をし、互いに主をほめたたえ、共に助け合います。これを私たちは互いに行うべきです。これまで自分を守るために壁を作っていたけれども、ただキリストにあって罪赦された者だということで、隣にいる兄弟にまた姉妹に手を差し伸ばします。

## 6B 平和の使者 17

17 それからキリストは来られて、遠くにいたあなたがたに平和を宣べ、近くにいた人たちにも平和を宣べられました。

「遠くにいたあなたがたに平和を宣べ」というのは、異邦人のことです。そして近くにいた人たちとは、ユダヤ人のことです。イエス様は私たちに平和をもって臨まれただけでなく、私たちを使者として平和を宣べ伝えるように召しておられます。「イエスはもう一度、彼らに言われた。「平安がああなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。」(ヨハネ 20:21)」

ですから私たちは、自分の心にある壁をなくすだけでなく、他者に対して橋渡しとなっていく働きを担っています。しばしば私たちは、橋渡しをする人々を批判します。伝道者ビリー・グラハムが批判をしばしば受ける一人です。彼の福音宣教には、何一つ妥協がありません。十字架のことは人にとってつまずきになることをはっきりと宣言し、聖書が神の御言葉であることを決して曲げたりしません。しかし、彼はそのように強く信じていない人々との交流を惜しみません。背教者と交わっ

ていると言われて、批判を受けるのです。いいえ、彼は自分の宣べ伝えているキリストを、まず自分自身に教えているのです。そして自分のうちにおられるキリストをもって橋渡しをしているに過ぎません。

### 7B 御父への近づき 18

18 私たちは、このキリストによって、両者ともに一つの御霊において、父のみもとに近づくことができるのです。

私たちは、聖なる全能の神を、自分たちの父として近づくことができるようになりました。ここにあるように、神の御霊によって、私たちの霊が神を「アバ、父」と呼ぶことができるようにしてくださったのです。人間は軽々しく、この方の名を呼んでいます。しかし、聖なる神に対して、罪をもつ人間が少しでも近づけば、瞬く間に打たれて死んでしまうのです。そこで律法においては、仕切りがありました。幕屋また神殿において、祭司のみが聖所で仕えることができました。そして、聖所の中に、さらに至聖所という奥にある空間があり、垂れ幕で仕切られていました。そこに年に一度、大祭司のみが血を携えて中に入り、罪のきよめをすることによって、ようやく聖なる神に近づくことができるのです。

けれども、キリストが十字架に付けられた時に、その垂れ幕が上から下に真っ二つに裂けたことにより、今や、聖なる神に、その流された血によって大胆に近づくことができるのです。子が父に近づくように、大胆に近づくことができるようになりました。

そしてパウロは、「両者ともに」と強調しています。ユダヤ人も異邦人も、神を自分の父とする家族の中に入ったのです。したがって次の結論になります。

### 3A 聖徒たちと同じ国民 19-22

#### 1B 神の家族 19

19 こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。

イスラエルに対して他国人であった異邦人である私たちは、同じ国民となり、神の家族となりました。イスラエルに対する約束と契約は今も有効です。それはローマ 9-11 章に書かれてあるとおりで、イスラエルを神は見捨てられたのでは決してありません。しかし、神は異邦人にも、イスラエルに対する霊的祝福を豊かに施してくださったのです。

ですから私たちは、旧約聖書を学びます。イスラエルに対する約束であっても、私たちはキリストにあって豊かな祝福を受けているのです。実に、律法も預言者もキリストを証言し、キリスト者はそ

の豊かさにあずかれるのです。

私たちは、キリスト者であるという国民意識を強く抱くべきです。日本国民である前に、神の御国の市民なのです。そしてキリストの平和を伝える使者として立てられています。人々の間に敵意があるところに、神の和解をもたらします。イエス様は「平和を造る者は幸いです」と言われました。それが神の子どもと呼ばれる条件なのです。

## 2B 礎石なるキリスト 20

20 あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。

パウロは、私たちのことを神の神殿として説明していきます。私たちの土台は、使徒たちの教え、すなわち新約聖書であり、これを堅く守ります。そして使徒たちは旧約聖書がキリストにあって成就したことを教えました。ゆえに旧約聖書も学びます。そのすべての中心はイエス・キリストであり、この方が礎石です。

## 3B 組み合わされた成長 21

21 この方において、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、

神の神殿において、私たちはそれを構成する部分であります。それがしっかりと組み合わされることによって一つの神殿となっています。建物が成長するという表現は変ですが、パウロはここで、建物のことを語りながら、やはりキリストの体、体としての有機体を考えています。私たちは、問題があると思っても、それによってむしろキリストを实践し、その愛の結びつきによって成長する機会となるのです。

## 4B 御霊による宮 22

22 このキリストにおいて、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。

イエスを信じる者たちには、聖霊が住んでくださいます。しかし、個々人が集合しているではありません。むしろ私たちがしっかりと組み合わされることによって、私たちの間に御霊が住んでくださるのです。御霊の賜物は、あくまでも私たちがこの平和の福音を互いに実践している中で生かされます。そして御霊が住まわれることによって、キリストがご臨在され、この方が栄光を受け取られるのです。